会報

一燈

すばらしい歌津をつくる協議会

第5号
6月22日(水)

縄文浜辺の里づくりスタート!!

歌津地区における仮設住宅建設もいよいよ終盤を迎えようとしている。避難所や町外集団避難をしていた被災者の方々もふるさと歌津に戻りつつある。

さて、いよいよ復興に向けての出発である。歌津地区の中心市街地となる伊里前地区や各部落の集落も安心して暮らせる高台に集団移転をしたいという声が大きい。既に議論を始めたところもある。

当協議会では、被災者がどう考えているかを把握するため、調査を開始した。

今後、町や県の事業として実施する際の大事な資料となるはずである。

各部落内で将来の集落づくりについて大いに議論を重ねて住み良く、そして住んでみたくなる集落を皆でつくってほしい。

タイトルの「縄文浜辺の里づくり」は、今回各部落に出向き、どの辺に集落を移したいか伺ったところ、海が見える高台を希望していた。そこは、縄文貝塚付近であった。遠く一万年も前、先人が住んでいたところである。縄文人は、安全なところに居を構え、必要なとき必要なだけ自然の恵みをいただいて生活をしていたのである。いくら科学や道具が発達しても自然の力にはどうにもならないと言うことを思い知らされた今回の大震災、反省の意味も込めて少し不便ではあるが、安全を第一に考えた里づくりを目指す覚悟をこめ、「縄文浜辺の里づくり」としたい。

震災前の伊里前商店街(三嶋神社側上空から)

震災後の伊里前商店街(三嶋神社から)

「元禄6年の町割り」

大震災後、伊里前契約会ではいち早く平成の町割りと銘打って、契約会の持ち山を提供し、伊里前の町を復興したいと会員あげて取り組んでいる。非常にすばらしい事である。

そもそも伊里前のまちはどのようにして、いつ頃つくりあげたのだろうか。

町史によれば、今から三百十八年前仙台藩は、領内の東浜街道(仙台を起点とし、細浦蛇王から白山を通り中在供養敷きに抜け石泉、小泉に抜ける街道)の整備をはかり、新しい宿場町をつくり、伊里前駅(道の駅はここからの発想と思える)とした。

長さ2町(約218m)道路の中央に用水路を通し、両側に門口6間1尺8寸(約11m)奥行き25間(約45m)に区画された(間口が狭いのは、当時の税は間口の広さで税額が決まっていたので狭くしたと伝えられている)。上町と下町に区分され、それぞれ21区画づつ42区画をつくった。当初の屋敷軒数は33軒と伝えられている。この町割りは、伊里前牧野(現前町切)と中在宇南田が構想を話し合い、作業にあたったのは峰畑甚左右衛門であったと伝えられている。町割り当初の分家は、牧野家6軒、千葉家3軒、払川左足1軒(阿部家)、上沢日陰1軒、上沢梅の木1軒、寄木小湊2軒、高橋1軒などであったと伝えられている。

以上が元禄6年の町割りである。(次号へ「平成の町割り」つづく)

保育所・保育園スタート
~6月10日からはじまる~

今回の大震災で床上浸水した伊里前保育所は子ども達がお昼寝をしていた布団、着替えバック等どれも水浸しとなった。自衛隊による整備、職員の方々及びボランティアの皆さんによる清掃により6月10日入所式が行われた。名足保育園も5月末まで避難所となっていたが、同じく10日入園式が行われ、共に保育所・保育園が本格的にスタートした。

今回、保育所・保育園がはじまるにあたり、通園バック、着替えバック、上靴入れ、布団等が寄附され、感謝の気持ちを胸に抱き、手渡された持ち物に名前を記入した。

伊里前保育所は、お昼寝時間中に強い地震に襲われた。パジャマの上に服を着せ、これから避難させようと思い窓の外を見た。その光景に驚く。家が横に動いている!逃げなくては…とっさに裏山に逃げることを選んだ。子ども達は実に冷静だった。一人も泣かずに先生方の指示通り行動し、道なき山道を避難し、避難所である歌津中学校に辿り着いた。それにより犠牲者を出さずにすんだ。とても誇らしい先生方である。

いつから始まるのか。今年は無理かもしれないと思いながら、待ちに待った保育所・保育園はようやく子ども達の元気な声と笑い声が響きだした。

《緊急雇用》
800人の雇用を守る
阿部長商店、ホテル観洋

水産業を手掛ける阿部長商店が800人を超える従業員を雇用している。

今回の東日本大震災で石巻市渡波工場から大船渡市にかけて立地する加工場や冷凍庫が壊滅的被害を受けた。ホテルも二階まで浸水し、ライフラインは寸断。観光業も先が見えない状態になった。

全員解雇の決断か、それとも何とか続ける方法がないか?…迷っていた。

被災直後、状況を調査して歩いていた阿部会長がゲキを飛ばした。「やるぞ。」昭和8年生まれの力強い意思の表示であった。さて、どのようにして雇用継続するのか。「中小企業緊急雇用対策事業」があることを知り、一年間従業員を朝から晩まで研修をするのである。それに国は給料の何%かを援助する事業である。懸命に取り組んでいる。一人も眠っている人がいない。

元のような会社にしたい。我が家の家計を何とか守りたいとの思いが伝わってくる。

800人の従業員が支える一人ひとりの後には4~5千人の家族がいるのだ。実に有難い決断である。

私も何とか応援したいと思い、恥をしのんで月4~5回、講師を勤めさせていただいている。

話す方も聞く方も大変な事業である。復興を祈るのみである。

歌津地区　死亡者・行方不明者

【死亡者】
〈高区〉
三浦養治　三浦みよ子
山内吉勝　井上　翼
三浦　洋　阿部市之進
菅原由治
〈韮の浜〉
阿部文夫　阿部こはつ
稲葉八千代　阿部権吾
小野寺久一
〈寄木〉
畠山智子
〈伊里前上〉
阿部清光
山内新治　及川フミ子
阿部祐子
〈伊里前下〉
千葉亀蔵　三浦信明
及川なみこ　高橋一夫
及川テル子　菅原清子
高橋かよ子　山口春樹
三浦夫三男
〈館浜〉
三浦とみの　千葉正義
三浦とくへ　千葉はつの
〈泊浜〉
三浦貞子　阿部はな
高橋律子　岩石和江
阿部勝喜　高橋　郁
三浦ふよこ
〈馬場〉
鈴木をしん　佐藤勝夫
及川忠男　及川輝雄
木皿洋市　及川　真
〈中山〉
三浦雅子
〈名足〉
阿部五男　及川こえの
及川鳥吉　最知元太郎
最知洋二
〈石浜〉
阿部きみよ　及川　武
〈田の浦〉
千葉美和子　三浦兼司
阿部栄子　三浦いさこ
三浦やゑ子　及川京子
〈港〉
及川啓太　千葉征市郎
千葉しげ子　千葉愛子

【行方不明者】
〈高区〉
三浦ゆう　梶原幸秀
〈韮の浜〉
伊藤すて子　稲葉なつ
阿部のり子
〈寄木〉
千葉東三郎　石田まさ子
〈伊里前上〉
渡邉久好　山内弘子
菅原かつよ　山口恵美子
小山榮子　久保田盛好
久保田くに　及川　勉
高橋英子　牧野典孝
〈伊里前下〉
及川　栄　及川千代美
三浦富紀子　守屋政良
千葉幸裕　牧野兵一
小野篤実　阿部佳恋
及川よし子
〈泊浜〉
高橋あさの　及川うめよ
高橋とよこ
〈中山〉
三浦初男　千葉たか子
〈名足〉
及川芳郎　及川弘子
最知民子　三浦　毅
千葉はつみ　阿部秀子
阿部樹菜
〈石浜〉
佐藤　猛　佐藤いつよ
阿部正六
〈田の浦〉
千葉　榮　千葉とめよ
阿部長七郎　三浦正一郎
三浦まつ子　三浦きくの
三浦鶴雄　三浦吉男
佐々木とめの　千葉一夫
三浦亜梨沙
〈港〉
千葉愃子

東日本大震災から三ヶ月、死者61名、行方不明者53名。自衛隊をはじめ各県警の皆様の捜索にもかかわらず行方不明者の発見が難航しております。犠牲となった方々のご冥福を心からお祈りいたします。

歌津地区　死亡者・行方不明者集計

地　　区	死者数	不明者数	合　計
高　　区	7	2	9
韮の浜	5	3	8
寄　　木	1	2	3
伊里前上	4	10	14
伊里前下	9	9	18
館　　浜	4	0	4
泊　　浜	7	3	10
馬　　場	6	0	6
中　　山	1	2	3
名　　足	5	7	12
石　　浜	2	3	5
田の浦	6	11	17
港	4	1	5
合　　計	61	53	114

【義援金口座を開設いたしました】

南三陸町歌津地区の子どもたちの教育のためと歌津地区の復興のため、義援金口座を開設いたしました。ご支援をお願い申し上げます。

教育に使ってほしい方は(教)と、復興に使ってほしい方は(復)とご記入下さい。

口座番号：仙台銀行歌津支店　普通預金　3072091
口座名義：すばらしい歌津をつくる協議会　会長　小野寺　寛
問い合せ先：Web：utatsu.jimdo.com
e-mail: utatsu1@gmail.com

グッズの販売をはじめます!!

「すばらしい歌津をつくる協議会」では、一日でも早く生活の再建に向け、グッズ（Tシャツ、タオル、うちわ）の販売をはじめます。

地域の復興のため、また日常の生活や美しい南三陸を戻すためにご支援をいただいた方々へ感謝の気持ちを込めたグッズを作成しました。

なお、この物品の売り上げの収益につきましては、すべて地域の復旧・復興及び生活支援に利用させていただきます。

Tシャツ　白（S・M・L・XL）

Tシャツ　黒（S・M・L・XL）

うちわ　（表：ありがとう、裏：南三陸歌津）
ハンドタオル　（ありがとうの刺繍）
※Tシャツの前には絆、後には南三陸歌津の文字が書かれている。

『復興に向けてワカメ養殖作業始まる』

船もない資材もない、気も湧いてこない。ガレキの山から漁師たちは今、六ヶ月後の収穫を目標にワカメの種付け作業を始めた。今だに多くの行方不明者がいる。全国から応援の警察の方々が懸命に捜索活動を続けている。まだまだ漁に出てはいけないとジッと堪えている。悔しさを込めて、一つ一つガレキを片付ける。出漁する日を夢見て。

十月にはロープに種子をはさみ、来年一月には収穫が待っている。真剣な表情にも笑みがこぼれる。おいしいワカメを消費者が待っている。頑張れ！！

稲渕地区のみなさん

参った　参った

通夜や火葬といえば喪服に黒ネクタイ、そして皮靴が普通である。しかし、そこには違っていた。喪主はジャンパーに長靴姿。まさに着の身着のままである。ご遺体も着の身着のままである。実に傷ましい遺体安置所の光景である。私は菩提寺の住職と共に毎日夕方5時に遺体安置所である体育館に枕経や通夜のお勤めの付添いとして通った。ビニールシートが敷かれた冷たい床に、毛布に包まれた犠牲者が横たわっている。何とも言いようのない雰囲気。住職はお一人お一人の俗名を唱えて、菊農家が寄附された菊の花1束をお供えし御経唱えるのである。ご家族は悲しみにくれ、火葬の日程も決まらず、決まっても火葬場まで行く車もガソリンもない。遺族は何とかしてと担当者に言い寄る。

何とか火葬の日程が決まった。ご遺体は軽トラックに乗せられ、少ない燃料を気にしながら隣の市の火葬場まで運ばれる。通常業務が終わった5時以降にお願いして夜中に火葬が終わる。これが津波被害の現実である。二度とこの悲しみや、やり場のない悔しさを繰り返してはならないとの思いが込上げる。